

# 自由律の泉

②

- |   |                    |         |    |                    |        |
|---|--------------------|---------|----|--------------------|--------|
| 1 | 水たまり残る薄雲           | 田中美太    | 9  | から梅雨の放射能いびつなゼロ     | 野谷 真治  |
| 2 | 二人合わせて一五六歳ほうじ茶がうまい | 白松 いちろう | 10 | 真夜中のボクサー鼓動は菜の花畑に   | 井尾 良子  |
| 3 | 生まれ変わる夢に香る百合       | 金澤 ひろあき | 11 | 嘘が上手になつたさびしきサルビア咲く | 久光 良一  |
| 4 | 二．．．．いらねえ          | 檜 幽可    | 12 | 忘れる勇氣消しゴムの角がとれる    | 黒瀬 文子  |
| 5 | 青葉が雨を貯めこんで夏を待つ     | 植田 鬼灯   | 13 | 死床の横で秋海棠に水をやる      | 新山 賢治  |
| 6 | 雪とけてバツケ芽を出す桜咲く     | 和崎 はると  | 14 | なぜか今日はもつと鳴れと稲光     | 部屋 慈音  |
| 7 | 夏の地下道ひんやりと迎えてくれる   | 無 一     | 15 | 待合室で病んでいく          | 富永 鳩山  |
| 8 | 空が青くてここにいる         | 佐山 祐介   | 16 | バチあてる人が違う神の怠慢      | 富永 順子  |
|   |                    |         | 17 | おり姫のせ夜空をめぐる木馬たち    | 平岡 久美子 |
|   |                    |         | 18 | 夜の雨の優しき音にしている      | 佐瀬 広隆  |

## ● 泉 ①より 一句鑑賞

風鈴がときどき風を思い出している

久光良一

▼こんな感じの、時間が好きですね。

(田中美太)

▼風のない日。それでも、風鈴は、吊るされている。見てみると、たしかに風を思い出しているのか、内緒話をしたくなる。風鈴を、ただ、眺めている時間が好きだ。(野谷真治)

愛でも恋でもないが二人で積木

黒瀬文子

▼愛も恋も超越して積み上げてきた人生、これからも二人で共同作業を続けていこうという前向きな一句。

(白松いちろう)

▼「積木」は夫婦で積み上げてきた時の蓄積の比喻、結婚当初は愛や恋の積み重ねの日々であったのだろうが、何時の頃からか互いの存在が空気のような無くてはならない存在となった。今尚積み上げていく二人の時の積木。(檜幽可)

宅配の青年に子が産れ露地駈ける靴音

小山榮康

▼ありのままを直叙していて、それでいてはずむような喜びが伝わってくる句です。「駈ける靴音」で、人生の大切な

時をしつかりととらえています。生き生きとした生活詩の可能性が、自由律にはあります。(金澤ひろあき)

続きは言わない雨に張り付いた裾

富永順子

▼女性ならではの感性でしょうか。見てはいけないものを見てしまった、すいません。(植田鬼灯)

昭和、平成と生きのびて令和はどんな花が咲くやら

石竹和歌子

▼西暦は直線的な時間ですよね。二〇一九年の次は二〇年。決して戻りません。元号の特徴は、改元すると「元年」、つまり「一」に戻ることです。「原点に返って、一から頑張りますよ」——自分なりの花を咲かせたいもの：(和崎はると)

散って影を染める

新山賢治

▼「染める」がいいです。桜の季節にふさわしい短律です。(無 一)

満月を片目で見ている

阿部美恵子

▼阿部さんの句はストレートに言葉が頭の中に入ってきて、しかも情景も浮かべることができる。とてもいい句だと思えました。(佐山祐介)

すりガラス少し開いてあんたの心

佐川智英実

▼すりガラスは透明でないのですつきりみえない、でも少し開いていると見えた気がする。きつと人の心も時々見えたり見えなかつたりなんでも解ろうとしないのがいいのかも。

(井尾良子)

▼他者との間を「すりガラス」にしておきたい人は、その隙間を見つけてくれる人を待っているのかもしれない。ふたりのさまざまな場面が一瞬にして浮かんできて、一六文字で一篇の小説でも読んだようです。

(寺田和可)

誰も知らない行列の先

吉本知裕

▼この行列の行く先はいったいどこなのか。誰も知らぬままに並んでいて、少しづつ前に進んで行くのです。どうやらこの行列から離れることはできないようです。これからどうなるかは神様におまかせしましょう。

(久光良一)

家系図の余白菜の花がいつぱい

井尾良子

▼家系図は命のバトン図。余白は命の可能性、その未来が希望の菜の花で輝いているという。何と幸せなステキな句だろう。

(黒瀬文子)

手書き文字の部屋に寝て起きる

富永鳩山

▼遠く離れた古里に住む師は、自らのリズムを取り戻した

ようだ。記号化したデジタル文字が飛び交い、人々の心に無作法に飛びこみ傷つける時代にあつて、書家の師は自ら残した無数の筆跡と共にゆつたりと漂つてほしい。(新山賢治)

語り合うことまだある散るなよ桜

金澤ひろあき

▼冬が終り、温かくなつて桜咲き、体も気分も軽く、解放された心が饒舌にし、満開の桜がそれを演出する。その楽しい嬉しい時が終つてほしくないと作者の願いがウキウキと伝わってくる。

(部屋慈音)

伸びる豆苗空見る若葉

田中美太

▼豆苗は安くていかにも栄養がありそうなのでスーパーで買います。放つておくとぐんぐん伸びます。この句は豆苗で切れるとしたら豆苗と若葉との対比でしょうか、今の時季にふさわしいですね。

(平岡久美子)

● 係より

次回も、皆様の作品一句(同封の投句用紙に)と、今回の作品の感想をお寄せください。メールでも受け付けます。

〈送り先〉 〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子 メール kumiko801@wh-wing.net

〈締め切り〉 2019年8月末日